

令和 3 年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人山本能楽堂		
施 設 名	山本能楽堂		
助 成 対 象 活 動 名	公演事業・普及啓発事業		
内 定 額 (総 額)		13,379	(千円)
	公 演 事 業	10,456	(千円)
	人 材 養 成 事 業	0	(千円)
	普 及 啓 発 事 業	2,923	(千円)

(1) 令和3年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概 要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場			
1	初心者の上の方伝 統芸能ナイト	7/31. 8/21. 9/25. 10/30. 他	能「松風」：山本章弘 女道楽：内海英華 狂言：善竹隆司 筑前琵琶：奥村旭翠	目標値	630
		山本能楽堂		実績値	833
2	たにまち能	4/4. 12/5. 20. 1/9	能「高砂」：山本章弘 狂言「酢薑」：茂山あきら 仕舞：「屋島」山本博通 「国栖」今村一夫	目標値	270
		山本能楽堂		実績値	185
3	光と照明による能舞台の陰翳	7/11	「葵上」山本章弘 井戸良祐 福王知登 増田浩紀 齊藤敦 古田知英 守家由訓 照明：藤本隆行	目標値	90
		山本能楽堂		実績値	89
4	とくい能※	6/13. 7/23. 9/4. 10/9. 3/20	※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、1公演は中止 「隅田川」「土蜘蛛」「放下僧」「巴」山本章弘 他	目標値	540
		山本能楽堂		実績値	426
5	能×文楽シリーズ※	7/3	能×文楽シリーズ 能と、落語と、文楽と、「宝尽くし」 能・仕舞：山本章弘 落語「はてなの茶碗」桂南光	目標値	180
		山本能楽堂		実績値	124
6	神男女狂鬼※	2/5	「弓八幡」河村浩太郎 「経正」山本麗晃 「松風」山本章弘 「鉄輪」河村浩太郎 「土蜘蛛」山本章弘	目標値	90
		山本能楽堂		実績値	96
7	シビウ国際演劇祭総監督キリアックによる一人芝居※		※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、公演中止	目標値	90
				実績値	0
8	新作能「オルフェウス※」	8/22	山本章弘 梅若猶義 山本麗晃 有松遼一 齊藤敦 飯田清一 守家由訓 中田弘美	目標値	90
		山本能楽堂		実績値	60

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和3年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概 要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場			
1	ストリートライブ能	8/28、11/22、1/2、1/5、3/2	「水の輪」、「高砂」、「羽衣」 山本章弘	目標値	1,000
		β 本町橋、あべのハルカス展望台ほか		実績値	1000
2	文化の伝承 花と芸能	2/19	「胡蝶」山本章弘、チェロ・ギターの演奏 住野 泰士・太田真佐代、装花：小森名花	目標値	90
		山本能楽堂		実績値	85
3	アートによる能案内	8/3	「舍利」山本章弘、造形遊び：井上信太	目標値	50
		山本能楽堂		実績値	28
4	能と遊ぼう！		新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	目標値	150
				実績値	0
5	高校 DE うたい隊	2/15	「羽衣」山本章弘 吉井基晴 井戸良祐 笠田祐樹	目標値	200
		夕陽丘高等学校		実績値	300
6	山本能楽堂・インターナショナルデイ	2/18	能「胡蝶」 山本章弘 吉井基晴 笠田祐樹 山本麗晃	目標値	90
		山本能楽堂		実績値	50
7	大大阪時代と芸能文化シリーズ		新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	目標値	90
				実績値	0
8	出前能		新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止	目標値	100
				実績値	0

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価													
社会的役割等（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。													
 Tradition for a better future 明るい未来のために伝統をつなぐ コロナ禍だからこそ、誰もが良質な文化体験を享受できる環境をつくる (客席数が減少しても、入場料の値上げは行わず、地域を文化で支える開かれた劇場を目指す)  山本能楽堂の社会的役割として、「Tradition for a better future」をミッションとしてかけ、立地する地域の特性を活かし、事業を組み立て「伝統をより良い未来社会に活かす」べく事業を実施した。また、令和2年度に引き続き、新型コロナウイルスによる被害拡大防止のため、緊急事態宣言等が発出されたため、イベントの自粛要請を余儀なくされ、当初の予定通りに事業を実施することができなかったが、そのような非常事態においてこそ「誰もが良質な文化体験を享受できる環境をつくる」をモットーとして、感染症拡大防止対策をおこない客席数が減少しても、入場料の値上げは行わず、コロナ禍で疲弊した地域を文化で支えるべく、開かれた能楽堂を目指し、事業を行った。 山本能楽堂は、大阪市を中心部の官庁街にあり、太閤秀吉が作った当時の町割りのままである大阪城の武家屋敷地区に位置し、90年以上能の普及と継承を行ってきた文化施設である。大阪は、秀吉が能の魅力に傾倒し、「見るだけ」でなく「自ら能を舞う楽しみ」を見出して以来、「嗜む文化」が形成され、その後、文楽、上方歌舞伎、落語、講談、浪曲など、多彩な上方伝統芸能が生まれ、育まれた「文化集積都市＝芸能の都」である。その特性を活かし、「芸能の都」として多面的・多角的に能を中心として、文楽、歌舞伎、上方舞、落語、講談、浪曲等の大阪で伝えられ、育まれてきた上方伝統芸能全体の、魅力の創出、情報発信による普及・啓発をおこない、コロナ禍においてこそ、市民によって守られ、「人の手から手へと」伝え続けられてきた伝統芸能が、社会における役割を再確認し、その魅力を再構築し、以下の事業を実施し、伝統芸能が社会に果たすべき役割を追求し、事業を実施することができた。 <table><tbody><tr><td>① ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承</td><td>(13事業 27公演 実施)</td></tr><tr><td>② 時代に生きる芸術創造の場</td><td>(7事業 13公演 実施)</td></tr><tr><td>③ 「芸能の都・大阪」としての魅力発信</td><td>(3事業 8公演 実施)</td></tr><tr><td>④ 豊かな文化芸術による人材育成・教育の場</td><td>(4事業 12公演 実施)</td></tr><tr><td>⑤ 国際文化交流・相互理解の推進</td><td>(1事業 1公演 実施)</td></tr><tr><td>⑥ 文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）</td><td>(3事業 1公演 実施)</td></tr></tbody></table>		① ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承	(13事業 27公演 実施)	② 時代に生きる芸術創造の場	(7事業 13公演 実施)	③ 「芸能の都・大阪」としての魅力発信	(3事業 8公演 実施)	④ 豊かな文化芸術による人材育成・教育の場	(4事業 12公演 実施)	⑤ 国際文化交流・相互理解の推進	(1事業 1公演 実施)	⑥ 文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）	(3事業 1公演 実施)
① ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承	(13事業 27公演 実施)												
② 時代に生きる芸術創造の場	(7事業 13公演 実施)												
③ 「芸能の都・大阪」としての魅力発信	(3事業 8公演 実施)												
④ 豊かな文化芸術による人材育成・教育の場	(4事業 12公演 実施)												
⑤ 国際文化交流・相互理解の推進	(1事業 1公演 実施)												
⑥ 文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）	(3事業 1公演 実施)												
助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。													
助成を受けたことで、コロナ禍においても「文化の灯を消さない」ために、感染症被害拡大防止につとめながら、できる限り事業を継続して実施することができた。しかしながら、通常の約50%程度の客席数にせざるをえない状態が続き、興行収入は大幅に落ち込んだが、削減できる経費をできる限り圧縮するなどして、何とか活動を継続して行った。そのような中、コロナ禍での活動が社会的に大きな評価を受け、「大阪文化賞」「グッドデザイン賞」「毎日地球未来賞クボタ賞」等を受賞することができ、関係者の大きなモチベーションにつなげることができた。 ・文化的意義：地域の文化遺産である上方伝統芸能の文化拠点として、多彩な演者と連携し、ネットワークを構築し公演を継続して実施することで、情報発信を行い、上方伝統芸能の振興と継承につなげることができた。 ・社会的意義：敷居が高いと敬遠されがちな伝統芸能を、現代人にも魅力的な切り口や方法で伝えることで、鑑賞者やファン層の裾野を広げ、地域住民の鑑賞活動の拡大に資することができた。同時に、演者同士の連携を育み、上方伝統芸能全体の活性化につなげ、創造活動の幅を広げることができた。活動を継続して実施することで、上方伝統芸能の周知につながり、他団体との連携が生まれ、「面」としての地域活性化につなげ、地域住民のシビックプライドを構築することができた。 ・経済的意義：上方伝統芸能を国内外の観光集客にも活かすことで、地域の発展を支え地域の活性化を行うことを目的に活動を行っているが、コロナ禍において人の移動が制限され、観光客がほとんど発生しなかったため、たため、経済的意義は実証されなかった。													

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

下記の目標を指標としてかけ、今年度の事業を実施した。未曾有の非常事態となった昨年に比べ、今年度は昨年度の経験を踏まえながら事業を実施したが、それでも数か月後の未来さえ予測できない状況の中、事業計画をたてても中止・延期を繰り返しながら事業を実施しせざるを得なかった。また、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点により、クラスターを引き起こさないよう客席数を減らすなどの対策をとった。加えて、外出自粛要請が多くの企業で自主的に行われ、特に夜の外出は控える社会的な傾向が強かったため、これまで夜に行っていた公演は昼公演の時間帯に変更を行うなど、対応を試みたが、入場者数の大幅な減少を改善することはできなかった。その一方で、コロナ禍においても、「文化の灯を消さない」よう公演を継続して実施していくというミッションを変えることなく、入場者数が減少しても、諦めずに事業を実施し、当初の目標を達成できるよう取り組んだ。その結果、歌舞伎役者・中村鴈治郎氏と文楽のコラボレーション公演や、コロナ禍においてもルーマニアのシビウ国際演劇祭から招へいを受け、ライブ配信で演劇祭に参加する等、当初の目標以上の成果も達成することができた。

【令和3年度の事業の目標】

- ① コロナ禍においてこそその伝統芸能が社会に果たすべき責務の再構築
- ② ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承
- ③ 「芸能の都・大阪」の魅力発信
- ④ 時代に生きる芸術創造の場としての活動
- ⑤ 豊かな文化芸術による人材育成・教育
- ⑥ 文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）
- ⑦ 国際交流・国際相互理解の推進

【令和3年度の事業の目標の達成について】

- ① コロナ禍においてこそその伝統芸能が社会に果たすべき責務の再構築
→コロナ禍においても、事業を即座に中止するのではなく、できる限り継続して事業を実施することで、伝統芸能の力で疲弊する人々の心に、希望や前に向かう気持ちを持って頂けるよう取り組むことができた。
- ② ユネスコ世界無形遺産の能楽の継承
→事業を継続して実施することで、能楽師が継続して舞台に立つ環境を作り、稽古や演能の分断を回避した。
- ③ 「芸能の都・大阪」の魅力発信
→コロナ禍においても、継続して事業を実施し「芸能の都・大阪」の魅力を発信し続けた。毎年恒例の大晦日の年越し公演も、中止するのではなく開演時間を繰り上げることで実施した。
- ④ 時代に生きる芸術創造の場としての活動
→中村鴈治郎氏と文楽のコラボレーション公演等、新しい芸術創造の場としての活動を行うことができた。
- ⑤ 豊かな文化芸術による人材育成・教育
→初心者も楽しむことが出来るよう工夫を凝らした公演や体験講座を数多く実施することができた。
- ⑥ 文化芸術の多様な価値の創出（社会包摂）
→高齢者施設での公演を計画していたが、新型コロナウイルスの拡大防止の観点から中止せざるを得なかった。
- ⑦ 国際交流・国際相互理解の推進
→シビウ国際演劇祭総監督のキリヤック氏を招いての公演は渡航ができなかったため中止となったが、演劇祭からは招へいを受けにライブ配信で参加する等、コロナ禍においても国際交流・国際相互理解の推進を行なった。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

令和 3 年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの被害拡大防止につとめながらの事業実施となったため、状況によって中止・延期を余儀なくされることを常に考えながら事業を行う 1 年となった。

しかしながら、感染拡大防止につとめながらも「文化の灯を消さない」ことをミッションとして事業を行ったため、緊急事態宣言の発出等により中止せざるを得なかった事業以外は、概ねほとんどの公演を工夫しながら計画通りに行うことができた。

「初心者のための上方伝統芸能ナイト」公演では、歌舞伎役者の中村鴈治郎氏と文楽の共演という新しい芸術創造の機会を得たが、これは逆にコロナ禍であったからこそ実現できた公演でもあった。また、初心者向けの解説付き能の公演「とくい能」では、新たな観客層の開拓のため、伝統芸能に造詣の深い、地元で人気の FMDJ を迎え事業を行ったが、こちらもコロナ禍において生まれた連携事業であった。



アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

「文化の灯を消さない」ことをミッションに掲げ、感染防止対策につとめながら、できる限り工夫を凝らし、公演を継続して実施したが、緊急事態宣言の発出等、やむをえず中止せざるを得ない事業もあり、公演事業、普及啓発事業ともに、当初の事業費より少ない事業費となった。また、演者同士のソーシャルディスタンスの確保のため、出演者の数を当初より大幅に減少する等の措置をとったため、事業費が減少した。

また、コロナ禍でも事業を継続して実施することを目指したため、参加者数はコロナ禍前よりも大幅に減少したため、アウトプットに対し、1 人当たりの事業費が大幅に増加することになった。今後、「ウイズコロナ時代」の事業の在り方を模索し、対策を講じる措置が必須となるが、能をはじめとする伝統芸能は、出演者の数を減らして上演することはできないため、今後大きな課題になっていくと考えられる。

全体として、事業費を当初の計画通りになるよう、様々な工夫をこらし、事業を実施することを試みたが、当初の計画通りには進まなかった。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

当能楽堂は、大阪に伝わる伝統芸能の普及・啓発、情報発信に特化した文化拠点として、能をベースにしながら、大阪で育まれた文楽、上方舞、落語、講談、浪曲等の上方伝統芸能全般の活性化を行うことで、「開かれた能楽堂」として、上方伝統芸能に携わる演者同士のネットワークを作り、当能楽堂から新たな芸術創造が生まれる役割を担ってきた。コロナ禍において、ジャンルの違う演者同士の交流の中で、様々な情報を共有し合い、お互いに勇気づける関係が構築され、さらにネットワークが強化された。

また、能の魅力を世界の人々と共有できるよう、新たに取り組んだ新作能「オルフェウス」は、ヨーロッパの人々に広く愛されているギリシャ神話の「オルフェウス」を題材に制作を行ったが、この作品を、ヨーロッパ最大規模を誇るシビウ国際演劇祭でオンライン配信を行うことで、大阪から世界に向けて、日本文化の発信を行うことができた。新作能「オルフェウス」は、「Noh for SDGs」として、「森の豊かさを守る」ための作品となっており、世界の人々と能を通じて、環境保全の大切さを共有することができた。

(1) 公演事業について

①上方伝統芸能の多彩なジャンルの演目をショーケース的に、オムニバス上演する公演を 15 年以上継続して行っているが、大阪に根差した伝統芸能の文化拠点として、大阪でしかできない公演をコロナ禍においても実施し、文化の力で地域の活性化をおこなうことができた。

②さらに、「初心者のための上方伝統芸能ナイト」公演では、昨年に続き、歌舞伎役者の大名跡の中村鴈治郎氏に出演していただくことができ、文楽とのコラボレーションという新しい取り組みを行い、芸術創造の幅が拡張した。

③「神男女狂鬼」公演は、ダムタイプの藤本隆行氏のLED照明演出により、能が五番立ての演能形式で、能が本来 屋外で公演が行われていたことを考察し、「現代に生きる魅力的な芸能」としての能の新たな可能性を追求する事業であるが、「字幕」や舞台転換に工夫を凝らし、事業を実施することができた。

④「能×文楽シリーズ」の公演では、大阪における「宝尽くし」をテーマに、能の仕舞と文楽・素浄瑠璃、落語を組み合わせることで、地域の魅力を芸能の力で再発見し、楽しんで頂くことができた。出演者も大阪の伝統芸能の世界をけん引する文楽・豊竹呂大夫、落語家・桂南光氏を迎え、大阪ならではの魅力あふれる事業となった。

(2) 普及啓発事業について

①公共空間で不特定多数の方に向けておこなう「ストリートライブ能」の活動は、能のアウトリーチ活動として有効であると考え、当財団では 20 年以上継続して取り組んでいるが、今年度も大阪を代表するランドマークである「あべのハルカス」の展望台や大阪の川の新しい拠点となるβ本町橋で実施する等、大阪の地域の魅力と連携して事業を行うことができた。

②「アートによる子どものための能案内」は、平面作家の井上信太氏を迎え、コロナ禍で心が疲弊しがちな子供たちに「心の奥の大切なもの」について考え直すきっかけを作り、ジェンダーレスなワークショップで、子ども達の心に安定とやすらぎが生まれるよう取り組んだ。

③「山本能楽堂・インターナショナルディ」公演では、大阪市とミラノ市が姉妹都市 40 周年の記念の節目を迎えたことと連携し、能楽の魅力をミラノの人々に伝え、更なる友好関係を構築できるよう取り組んだ。

④「文化の伝承 花と芸能」能楽堂全体に活けられた春のいけばなに、参加者が長時間その場を離れなかったり、何度も何度も鑑賞をしたりし、芸術が人の心の栄養や癒しになることを改めて実感した。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

◆山本能楽堂は、能・狂言の専用劇場であるが、約 20 年近く前から、大阪市、大阪商工会議所、大阪観光局と協働で、大阪に伝わる上方伝統芸能を貴重な地域資源と捉えなおし「初心者のための上方伝統芸能ナイト」公演を継続して実施し、上方伝統芸能の新たなファン層を構築してきた。これまでに約 200 公演を実施してきたが上方伝統芸能の演者にとってのプラットフォームとなり、新たに企画や公演が生まれ、大阪の実演芸術等が振興され、地域の文化芸術の発展につながっていくと自負し、その役割を今後も担えるよう事業に取り組んでいきたい。

・令和 3 年 9 月 3 日 日本経済新聞「文化の風」講評（佐藤洋輔氏）

山本能楽堂（大阪市）が 2006 年から開催してきた公演「初心者のための上方伝統芸能ナイト」が 10 月に 200 回を迎える。一流の演者が見どころをコンパクトに上演し、新規ファン開拓を進めてきた。200 回の節目を前に、8 月 21 日の公演では、歌舞伎俳優の中村鴈治郎が文楽の人形と共に舞う特別なコラボレーションを披露した。

（中略）この日 198 回を迎えた「上方伝統芸能ナイト」のコンセプトは「デパ地下」だ。能や狂言、文楽、上方歌舞伎、上方舞、落語、講談、浪曲などから数種の芸能を 20 分程度見どころを凝縮して上演。共通性のある演目を比較鑑賞する等構成も工夫し「難しそう」「何からみればいいのかわからない」という伝統芸能初心者につまみ食い感覚で魅力を伝えてきた。手軽さをうたうが、出演者は第一線で活躍する面々。上方の伝統芸能の担い手たちが交流する場にもなってきた。その原点には 1960 年代に若手が集い、上方芸能の低迷を打破した同人「上方風流」がある。（中略）「かつて上方風流の面々を見て、多様な芸が土地に根付き、その担い手たちが近隣に住んでいるのが大阪の魅力だと実感した。この場所に立つ能楽堂の強みを生かしたいと思った」と章弘。今回の歌舞伎と文楽の共演の成果もその一つ。「普段から異ジャンルが交ざりあってきたイベントだからこそ実現した。貴重な場だ」と鴈治郎。（中略）大阪城のほど近くに立つ能楽堂は観客の裾野を広げ、芸を磨き合う場として上方の芸能を活性化させていく。

・令和 3 年 9 月 27 日 読売新聞「伝統芸」講評（淵上えり子氏）

大阪は創意工夫の街だ。商いだけでなく、芸能においても。一つの舞台で歌舞伎俳優と文楽人形が”共演“するなんて、なんと大胆で楽しい試みだろうか。豊かな文化的風土に裏打ちされた舞台に心が躍った。（中略）やはり上方芸能は多彩で、尽きせぬ魅力に満ちている。

初心者のための上方伝統芸能ナイト。山本能楽堂が主催。複数の伝統芸を初心者にも分かりやすくする企画で、「デパ地下の試食コーナー」のような公演として親しまれている。（中略）

・令和 4 年 1 月 22 日 毎日新聞「伝統芸能 身近なものに」講評（今西拓人氏）

（中略）そんな意気込みが、能に限らない多彩な公演プログラムに現れている。地域の名前を掲げた「たにまちな能」「とくい能」をはじめ、外国人や小学生対象の公演、文楽や落語、講談など様々な演者が出演する「初心者のための上方伝統芸能ナイト」など。「演者自身がその土地に住んで暮らしている。それこそが大阪ならではの特徴。街と芸能が一体となって盛り上がることができる」（中略）

◆「Noh for SDGs」として能の力で環境保全を目指す活動が、各界から注目され、令和 3 年 8 月にはシビウ国際演劇祭から招へいを受け、大阪から世界に向けて オンライン配信を行った。

・令和 4 年 4 月 20 日 読売新聞「SDGs 未来へ約束 action」講評（編集委員 坂成美保氏）

日本の伝統芸能で、室町時代から 600 年の歴史を持つ能楽。山本能楽堂は、次代を超えて継承されてきた能楽の「伝える力」を環境保全に役立てようと、水の浄化や森の豊かさを題材にした新作能の制作・上演に取り組んでいる。持続可能な未来に向けた伝統芸能の発信力が注目されている。（中略）コロナ禍に見舞われた 21 年にルーマニアで開催された世界三大演劇祭の 1 つ「シビウ国際演劇祭」でもライブ配信された。海外公演を経て、出演者やスタッフは、「言葉や民族の違いを超えて、世界の人々と豊かな自然を守る気持ちを共有できた」（中略）

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

事業を通じて、地域の実演芸術等の振興や地域の文化芸術の発展に寄与するとともに、組織活動も持続的に発展することができた。昨年度に引き続き、今年度はコロナ禍で当初計画していた通りの事業を行うことができなかったがポストコロナを見据え、様々な期間や団体との連携を深めることができた。

さらに、これまでの活動とコロナ禍での活動の双方が認められ、今後の活動の更なる発展や持続性に向けて大きな弾みとなった。

コロナ禍での受賞歴 / グッドデザイン賞 2021、「大阪文化賞」、第 9 回毎日地球未来賞クボタ賞（準大賞）

（事業運営について）

これまで、能楽堂の運営は、能楽師の見習（内弟子）や家族が中心となり行われることが多かったが（山本能楽堂も約 20 年前にはそのような事業運営であったが）、演劇の企画・制作の熟練者や文化財団、規模の大きなホールの運営経験者をスタッフに迎え組織を構築・強化し、定例会議を実施し、PDCA サイクルを回すことで、機能強化され、運営が飛躍的に改善した。さらに銀行勤務を経験者を経理に迎え、外部監査の的確な指導を受けることで、組織が継続的に改善し、機能が強化された。さらに、職員が、文化庁や、芸術団体、商工会議所、NPO 団体等が主催のセミナーや講習会、研修会ならびに勉強会に積極的に参加することで、組織内部でのキャリアパスに取り組んでいる。

（演者・芸術家ならびに劇場・音楽堂間のネットワークの形成）

事業を実施する中で、伝統芸能はもとより、西洋音楽、コンテンポラリーダンス、ブレイクダンス、人形劇、現代美術家、茶道家、華道家など幅広い舞台芸術関係者との人的ネットワークを構築し、常に新しい芸術創造の可能性を追求している。

（教育機関とのネットワークの形成）

事業を実施することで、活動が認められ、京都造形芸術大学、相愛大学と連携し、学生達がフィールドワークに訪れ、公演に参加する等ネットワークを形成している。また、関西大学の能楽部を指導し、後継者の育成につとめている。大阪市内の小学校、高等学校の生徒の授業ならびにキャリア教育等を受け入れている。

（経営戦略について）

年間を通じて後援会の入会の勧誘ならびに寄付者・支援者への依頼、他の助成金への申請を継続的に実施し、安定的な収益基盤をつくり財源確保できるよう取り組んでいる。事業を行い、活動に参加していただくことで、支援者への理解と、新規支援者の獲得につなげられるよう努力している。財政状況は厳しい状況が続くが、支援者の数は増加している。

（海外との連携/将来の戦略）

大阪大学大学院に能の研究のため留学してきた一人のブルガリア人ペトコ氏との出会いから、海外公演を実施し、日本と東ヨーロッパを中心とした国際文化交流を継続して実施している。コロナ禍を除くこれまでの 9 年間に、8 か国、17 都市で 49 公演を実施してきた。ヨーロッパ最大規模のルーマニアのシビウ国際演劇祭から 7 年連続で招へいを受け、強いネットワークを築き、令和 3 年度は山本能楽堂からライブ配信で参加した。海外公演ならびに海外との文化交流を通して得た、能の魅力を伝えるためのノウハウや、草の根的な国際相互理解を深めるための視点をインバウンドの推進や、初心者向けの普及・継承活動に活かし、組織の持続的な発展につなげている。また、海外との連携は、常に新しい視点や感性を活動に注入することにつながり、山本能楽堂の組織活動が持続的に発展するための相互作用として貴重なものである。